

モルモットを教室の中で育ててみた

文京学院大学人間学部 特任教授 森田和良
(元筑波大学附属小学校 副校長)

I 教室でのモルモット飼育の概要

1 触れる楽しさが困難さを克服する

私の学級（2年生）では、1グループ10人で1匹、合計4匹のモルモットを教室内で飼育している。このことは担任である私の提案から始まった。

モルモットを学級で飼い始めると、モルモットに関する情報は学級全体の関心事となった。一人の子どもの発見を学級全体で共有できた。それは、誰もがこのモルモットを飼っている、自分の学級のモルモットであるという意識がもてるからである。

さらに、共同で飼育することで、生き物とのかかわりだけでなく、児童同士のかかわりや、家庭同士のかかわりも深まっていくのである。

飼育のゲージは、衣装ケースを用いた。その中に新聞紙を敷いて、モルモットフードや野菜、水を与える。毎日、朝と放課後には新聞紙を交換し、えさと水を与える。

今日は、私は学校に行ってモルモットの世話をしました。そして、モルモットのお世話をしているときに、朝の活動の時間が来てしまいました。でも、モルモットのほうをちゃんとやってから朝の活動に出ました。モルモットは、見ただけでふわふわしているように見えます。手でさわるともつとふわふわして気持ちいいです。今日モルモットのお世話ができてうれしかったです。（I子）

そして週末には、モルモットを各家庭に持ち帰り世話をします。家庭では、大好きなモルモットが独り占めできるのである。

今日は朝から晩までモルモットと遊んでいました。昨日からモルモットを一人じめしたかったです。そして、私は大発見をしました。モルモットが大きな声で「キーキー」となると、かならずおしっことうんちをするということです。人間の赤ちゃんと同じです。モルモットはえらいと思います。（U子）

飼育し始めた頃は、モルモットに触れることが楽しく、世話の苦労やもち帰りの困難さは、この楽しさに比べれば大したことではなかったようだ。

2 共同の飼育活動が新たな様式を生み出す

週末になるとモルモットは子どもの家へ行く。持ち帰る子どもは、自分の荷物以外にもモルモットのケースとえさ、飼育日記、ゴム手袋等の道具を抱え、電車やバスで帰るのである。なかなかの重労働だ。このような状況が、友達に協力する姿勢を生み出した。駅まで荷物を分担して持ったり、同じグループの子ども同士と一緒に帰宅したりするようになっていった。

今日は初めてモルモットをもって帰りました。帰るときは荷物がありすぎて重たかったです。でも、同じグループの友達が少し手伝ってくれて助かりました。家に帰ったら、まず新聞を2回も変えてあげました。えさは、にんじん、キャベツ、モルモットフードをあげました。にんじんをあげるととびついてくるみたいに見えました。ぼくは、そのときモルモットをじーと見つめていました。（H男）

このようにモルモットの飼育という活動が、子どもの生活に刺激を与え、モルモットは勿論、その飼育にかかわる友達や家族へ新しい“心づかい”が生まれ始め、子どもの中に新たな生活様式ができ始めた。モルモットが個人のペットであればこのような動きは生まれにくいだろう。飼育に参加しているみんなのモルモットという意識が、“心づかい”を生むのである。

3 多様な価値観のぶつかり合いから、新たな文化が生まれる

ところが、モルモットの飼育に慣れてきてモルモットに対する関心が低くなった頃、ある子どもの不満が爆発した。

いつも週末になると思うことです。モルモットの持ち帰りについて自分勝手な人が多いということです。モルモットの奪い合いということではありません。ほとんどの人が「今日はだめ。都合が悪い」と言い訳をして先に帰ってしまいます。私は何回もあずかりました。11月は2回もあずかりました。私はモルモットをあずかるのをいやがっている訳ではありません。みんなの態度に腹をたてているのです。今週がだめなら来週都合をつけるとか、そういう気持ちがみんなにはないみたいです。みんなのモルモットなんだから、みんなでお世話するのが本当だと思うし、私はそうしたいのです。あずからないでラッキーという気持ちが、みんなからただよってきます。私のいかりは、ばくはつ寸前です。私が前に作った持ち帰り順番表は、今やボロボロのただのゴミに成り下がりました。

冬を越したら、モルモットたちに赤ちゃんがうまれます。しばらくすると、その赤ちゃんモルモットをもって帰ると思います。そうすると、今モルモットに見向きもしない人達は、きっと言うでしょう。「〇〇さんや〇〇くんは、モルモットをたくさんもって帰っているから、今度は私たちがもって帰る番だよ」そういうひどい言葉を想像してしまうのは、被害妄想でしょうか。

モルモットはきっと早く子どもがほしいと思っているでしょう。私もそうです。でも、赤ちゃんのことで言い合いになったり、けんかになったり、おたがいの思いやりのなさを見せ合うことになるのなら、赤ちゃんは生まれて来ない方がいいかなと思ったりします。

さっそく、この日記の内容を子どもたちに紹介した。子どもの世界のこととはいいいながら、ここに至るすべての子どもの言動が、子どもたちだけで形づくられている訳ではない。教師も含め子どもの周囲にいる大人の価値観の影響も大きい。当然、それぞれの家庭にも事情がある。預かりたくても預かれない事情も起きるだろう。しかし、それらを乗り越えて何とかしようとする子どもと、困難さから逃げようとする子どもとが出てくる。そこには、まさに、その子どもの“生き方”が表出するのである。

困難さを引き受けた子どもが優れている、避けた子どもは劣っていると主張しようというのではない。私自身も、自宅でモルモットを飼っているが、毎日の世話は口で言うほど容易いものではない。

ここで大事なことは、このような問題を子供達が本音を出し合い、どうやって解決していくのかということではないだろうか。

無責任だと批判するのは簡単だが、それで問題がすべて片づく訳ではない。無責任な行動をとってしまうその背景は何なのか、そして、どのような手立てをとればモルモットを飼い続けられるのかを、本音で語り合うことが必要である。このときに、自分とは違った価値観に出会う。そして、自分の価値観だけでは通用しない現実を知って、その問題を解決する行動様式を創出するのである。ここに子どもたちの新たな文化が生まれるのであろう。この文化は、この集団の新しいルールとして受け入れられ、学級という集団も発展していくのである。

4 支えてもらう飼育活動から、臨機応変な対応が生まれる

この一件から飼育活動も順調に進んでいたが、再びトラブルが発生した。

モルモットを自宅へ持ち帰る日、1匹のモルモットが教室に置き去りになった。順番にあたっていた子に用事ができたため、母親がモルモットを教室に取りにくる約束だった。ところが、その事情を知らない同じグループの子どもたちは、もって帰るはずの子が既に帰宅してしまったことに気づき慌てた。仕方なく別の子がモルモットをもち帰った。その後に教室に来た母親は、残っているはずのモルモットがいないのでびっくりして捜し回ったという事件だった。

ここで、子どもたちの臨機応変な対応が見られた。モルモットの居残りに気づいた子がモルモットを教室に放置しても、それは順番に当たった子どもの責任で、残した子どもの責任ではない。それなのに、残されたモルモットのことを第一に考えて、世話をする苦労や予定外の持ち帰りを引き受ける負担感を乗り

越えて対応してくれたのである。

この事件以降、子ども達は順番を話し合いで決める、事前にもち帰りを確認する、都合が変われば柔軟に順番を入れ替る等の対応できるようになってきた。勿論、これらは子どもだけの力で実現したのではない。子どもの相談にのってくれる家庭、他の家庭の都合を事前に伺ってくれる保護者の協力があったのである。それらの行為が保護者の指示に従ったものではなく、子ども同士のやり取りの中で成立しつつあることを感じている。保護者の支援を受けつつ、徐々に自分の判断で物事を決められるようになってきているのである。

このように、初めて飼育する子どもが、教師や保護者、慣れている友達に支えられて活動に参加し始め、徐々に自分が中心になって責任のある決断ができるようになっていくことが大事なのである。

最初は慣れた他者の支えを受け、そこで少しずつ物事を決めて行くために必要な手続きを学んでいく。また、発生したトラブルを解決していく。それらの過程から問題解決の方法を学び取っていくのである。

このような「参加的な活動」によって、参加した子どもの価値観や生き方が発展していくとともに、これらの手続きを経ることで学級の文化が創り出されて行く。そして、それがその学級の風土となっていくのである。

5 大切に育てる心が工夫を生んだダイエット作戦

子どもは、自分たちのモルモットを大切に育ててきた。ところが、大事に育てるあまり、えさを豊富に与え過ぎた。また、狭いケージに入れているので、運動不足にもなった。最初は 500 g 程度のモルモットが、最近では 1 kg を越えるようになった。獣医さんからも「ダイエットをさせなさい」と言われてしまった。

ついに、モルモットのダイエット作戦が始まった。

週末に家庭にモルモットを持ち帰ったとき、広い庭や公園で遊ばせるようにしてもらった。それから総合学習の時間に、モルモットを広場に連れて行き遊ばせた。

ところが、これではダイエットにならないと分かった。なぜならば、モルモットは草むらに生えているオオバコが大好物だったからだ。オオバコを見つけては食べ続けるばかりで、運動よりも食べている方が長かったのである。ダイエットどころか、ますます体重が増えてしまった。

次は、昇降口前のコンクリートや教室前のベランダでの運動を試みた。しかし、熱射病になる危険性や猫やカラスに襲われる危険もでてきた。このままでは命にも影響するのではないかと心配になり、必死で考えた結果、教室内で放し飼いにすることを子どもたちは考え出した。

試しに授業中にモルモットを教室内で放し飼いにしてみた。すると、モルモットは子供達の机の下を自由気ままに歩きだした。子供達は、自分の足元にモルモットが来ると、喜んでしまって授業どころではない。授業に身が入らない。もっと良い方法はないかと考え、柵を作ってその中で遊ばせる方法を考えた。柵を作れば、その中で運動もできるし、外に逃げる心配もない。授業にも支障は少ないと思った。さっそく、柵作りが始まった。

家から板切れを集め、簡単な柵を作り始めた。これがなかなか大変な作業になった。子どもは、ノコギリで板を切ったことがない。また、金づちでクギを打ったことがない子どももいた。指を間違っ打つ子どもが続出。クギが曲がってもそのまま打ち続けるので、クギがグニャグニャになって板にめり込み、板を貫通することがなかなかできない。失敗して曲がったクギが山のようになった。

作業は困難を極めたが、子どもは時間を忘れるくらい作業に熱中した。柵ができあがると、今度は柵に色をつけた。絵の具やペンキで色をつけた。中には意図的に色をつけないグループがあった。理由を聞いたら、モルモットは板を噛むことがある。もし、ペンキで色をつけてしまうと、板を噛んだときにペンキを食べてしまうかもしれないと考えたというのである。モルモットの体を気遣ったのである。子どもながら良く気が付くものだと感心した。

柵で作ったサークルにモルモットを入れてみた。モルモットは柵に沿ってうろうろ動き出し、ときどきフンをする。おしっこもする。新聞紙を敷き詰めて柵をする方が良いことに気づいた。これでダイエットも順調に進む。

午前の授業中は、この柵の中でモルモットを放し飼いにした。時々、脱走するモルモットもいるが、気

が付いた子どもが静かにモルモットをもとに戻すようにした。この作戦の結果、見事にダイエットが成功し、100 g近くも減ったモルモットも出るようになった。

6 クラス替えを目前にした“思い出づくり”

この学級のクラス替えが近づいてきた。4匹のモルモットもこのまま飼いつづけることはできない。残り少ないモルモットとの時間を大切にするとともに、モルモットとの思い出を残そうということで、「総合活動」の時間を使って新しい企画に取り組み始めた。

あるグループは、モルモットとのかかわりをVTRに残す。また、別のグループは、デジタルカメラを使ってのアルバムづくり、また、別のグループは、モルモットの実物大の人形作りに取り組み始めた。再び、モルモットを軸に、学級の総合活動は動き始めた。

II 動物との触れあいと子どもの成長

1 命の責任を背負う“飼育”

S子が、モルモットのことを日記に書いてきた。

11月11日（土曜日）

キーちゃんが、私の家に来ています。とってもかわいいです。けれど、このごろキーちゃんに、大変なことがおこってしまいました。それは・・・

昨日の朝、学校でT君がキーちゃんの新聞をかえていると、T君が「何だかフンが小さ〜い」と、言っていたので、見てみると、フンの数は少なく、とっても小さいです。どうしたのかな〜。心配。先生、どうしてか、分かりますか。分かったら、教えてください。

11月12日（日曜日）

今日の朝、キーちゃんの様子を見てみると、フンはたくさんしていました。良かったー。けれど、まだフンの大きさは、小さいです。エサは、ちゃんと食べています。それに、元気もあります。どうしてかな〜。少し心配です。キーちゃんは、このごろキャベツをけっこう食べています。

「キーちゃん」というのは、学級で飼育しているモルモットの名前である。この日記でも分かるように、週末はモルモットを各家庭に持ち帰り、子どもが世話をしている。S子は、持ち帰ったモルモットのフンの大きさの変化に気づき、心配でこのような日記を書いた。

フンの数や大きさ、フンの状態などが気になるのだ。それは、「自分のモルモット」という意識を強く持っているからだだろう。もし、学校の飼育舎で飼育していたら、このように細かな点に気を配ってくれるかどうか疑問である。

なぜならば、飼育舎で飼育されている動物と子どもとのかかわりは、自分の気が向いたらえさを与える、一緒に遊ぶ程度にならざるを得ない。つまり、人間の気分次第になる。飼育委員となれば別だが、低学年の子どもにとっては、せいぜいこの程度のかかわりだろう。これでは、糞尿の始末やケガ・病気の手当、休日の世話など、面倒な部分はほとんど背負わなくて良い。このようなかかわりでは、生き物を飼育している実感はもてない。都合の良いペットである。

動物を飼育するということは、かわいい、えさを喜んで食べてくれる、一緒に遊んでくれるという楽しい部分だけではなく、糞尿の始末やケガ・病気の手当、休日の世話も含めて飼育なのである。動物の命を預かっているという責任がかかるものなのである。

面倒な部分は、飼育委員の上級生や先生に任せるのでは、あまりにも“つまみ食い”のような飼育と言わざるを得ない。飼育では、手をかけ時間をかけるから、そこにじわじわと“情”が芽生えていく。時間と手間をかけることなく、効率よく何かを身につけようとしても、それは無理なことではないだろうか。

21世紀という科学が進歩した時代であっても、この時間と手間は、捨てるはいけない“面倒くささ”で

はないかと思う。森田学級の子どもの姿から、そう感じるのである。

2 集団で飼育するからこそ、学べたこと

モルモットの飼育を始めて2年がたった頃、1匹のモルモットが死んだ。その死を契機に自分の飼育を振り返ったU子は、次のような作文を書いた。

ショックだった。そして悲しかった。学校で泣いたことは何回かあるが、これほどまでに心がいたかったことはない。人間を含めて動物はいつか死ぬ。そのことは知っていたはずだった。死というものがこんなに身近なのだというのを、冷たくなり固くなったキーちゃんが無言で私にうったえた。

キーちゃん、シーリン、白ちゃん、マルちゃんと初めて出会ったのは2年生の5月だった。シーリンをだき、温かい鼓動を聴診器で聞いて、一生懸命お世話しようと、私は心から思った。みんなもきっとそうだったと思う。しかし、私を含めてこのことが「お世話をしたい」という気持ちの内訳としては、「かわいいから、さわりたいから」という興味が80%ぐらいをしめていたに違いないと思うのだ。当然、次第にシーリンへの興味はうすれてゆき、11月には週末のお世話はグループ内の2、3人の持ち回りとなった。

そのことで、Cグループはみんなと話し合いをしたし、けんかもした。文句も言った。シーリンのことは大好きだし、お世話だっていやではなかった。でも、そのころの私も「世話を押しつけられて」という不満の中で、シーリンのお世話をきくと義務感からやっていたはずなのだ。シーリンの気持ちを考えてあげる余裕すらなかったのである。

その後、話し合いが実を結んで、週末のお持ち帰りはスムーズに行くようになった。虫のお持ち帰りとなつた人が、別の人にシーリンのお持ち帰りを頼み、でも、代わってくれた人への感謝の気持ちから、バス停まで送っていくという光景を私は見た。気持ちよく代わってあげた人もえらいし、バス停までわざわざ遠回りをした人もえらい。みんながシーリンのことをちゃんと考えてくれているのがわかって、なんだか胸が熱くなり涙が出た。

動物のお世話は義務感ではつとまらない。義務感の中でのお世話はつらいし、さびしい。愛情を持ってこそそのお世話が本当のはずである。責任の押し付け合いの時期もあった。こんな私たちをシーリンはどんな気持ちでながめていたのだろう。何か言いたくても伝えられないシーリンの心を思いはかろうとするやさしい気持ち。話し合いをすることで問題を解決していくことの喜び。これがシーリンとCグループの仲間がくれた「宝物」である。

このように集団で小動物を飼育することで、事前に想定していないことも学ぶことができた。最初は、小動物と子どもという二者間の成長しか想定していなかった。この成長は勿論見られたが、それ以上に、小集団で飼育することで子ども同士や家庭も巻き込んだ新たな生活様式の創出が必要となったのである。

集団での飼育は、一人の子どもが世話のすべてを背負う必要はなく、自分ができる役割を果たすことで良い。そして、その役割も日々さまざまな状況が変化する中で、不都合を生じた子どもを都合がよい子どもがサポートする。そして、サポートしてもらった子どもは別の仕事を後で分担するという、臨機応変な対応を生むのである。このような大事な能力が育つ状況が生まれることは、たいへん価値があると思う。

ところが、同じ状況に子どもがいても、教師や親が機械的に持ち帰りの順番を決めたり、飼育の順番をマニュアル化したりして、トラブルを回避するという考えであれば、臨機応変な対応は子どもには生まれず、指示に従うだけの子どもか、マニュアル通りにしか動けない子どもになるだろう。そして、結果的に“未知のトラブルに対応できない子ども”になるのではないかと考えるのである。

このトラブル処理の能力も、飼育活動を通して学ぶことができる大切な能力だと言っても良いのではないだろうか。

3 「持ち帰りの制度」が発展した「育てる会」の発足

◆「学校で飼えば」は通用しない

クラス替えが近づいてきた。飼っていたモルモットをどうするか話し合いを持った。

最初は、「新しいクラスで飼えばよい」「先生が飼えばよい」「学校の飼育小屋へ入れればよい」などと、子どもたちは気軽に考えていた。

そのような子どもたちに、私は次のように反論した。

「新しい学級へ分けるとすると、どのモルモットを持っていくつもりなの」つまり、子どもは新しい学級へ自分が行くから、当然、自分が2年間育ててきたモルモットを持っていけると思っていた。しかし、同じモルモットを育てた子供たちが同じ学級になるとは限らない。他のモルモットを育てていた子どもは、自分のモルモットを引き取りたいと言いつつ出さず。さらに、新しい学級の先生が了解してくれるのかも決まっていない。様々な問題が出てきたのである。

「先生が飼う」という方法には、「きみたちは、まったくモルモットを飼ったことがない人に、自分のモルモットを預けられるの？そして、その人たちが上手に世話ができなくても我慢できるの？」と問い返した。新しい森田学級の子どもは、飼育を体験していない子ども集まりである。その子どもたちが、未熟な扱い方をすればけがや問題が発生することは容易に想像できる。それに対して口出しも手出しもできない。それで良いのかと尋ねたのである。すると、「それは我慢できない」という。2年間大切に育ててきたモルモットを乱暴に扱われることは我慢できないのである。

「学校の飼育小屋に入れる」という意見には、「学校って、誰のこと？学校で育てるとするのは、誰が育てると考えているの？」と問い返した。すると、子どもは「校長先生」「飼育委員会」などと言う。そこで「休みに日はどうなるの？」とさらに質問した。学校のものになったモルモットを、飼育委員でもない元森田学級の子どもが持って帰るのはおかしい。また、順番を決める権限もない。

◆「みんな」なら、本当にできるの？

このように、子どもの出した案はすべて否定された。では、どうするか。本気で考え始めた。すると、数人が自宅で引き取れるかどうか家に聞いて来ることになった。その中から、2匹が引き取られることが決定した。そして、1匹は直前で死に、1匹が残った。このグループは、「みんなで飼うならいいよ」という家庭の了解を得たというのである。

でも、「みんな」の中には無責任さが隠れているような気がしたので、そのグループの子どもたちに「家に帰って、飼っても良いというのは僕の家だけだったら、どうする」と聞き直すように指示した。つまり、たった1軒になってもモルモットを引き取るつもりがあるのかを確かめさせたのである。すると、5人以上いた「了解」の家が、すべて断りに来た。結局、1匹のモルモットのもらい手が決まらなかった。

そこで、私は「仕方ないから、保健所へ引き取ってもらおう」と提案した。子どもは「保健所に行くとうなるの」と質問するので、「安楽死かな」と子どもを脅かした。子どもはびっくりにした。「それはいやだ」と言い出す。「仕方ないだろう。だれも引き取ってくれないのだから」と私は言った。子どもたちは、このままだとモルモットが死んでしまうというので、必死になって家の人を説得し始めた。

◆「育てる会」の発足

その結果、3人の家庭が「自分の家で引き取って良い」と申し出てくれた。

つまり、自分1人で責任を背負って育ててくれるという家庭が3軒出たのである。きっと子どもたちが必死になって親を説得したのであろう。

そして、立候補してくれたその3人で相談し「モルモットを育てる会」というものを設立した。その話を聞いた1人の子も加わって、2週間交代で4人の家庭を巡回するシステムを作り上げたのである。

このシステムは、モルモットが死ぬまで2年以上継続した。

この様子が、平成14年度にNHK教育番組として放映された。

◆「育てる会」の完結

「モルモットを育てる会」で飼育していたモルモットが死んだ。通算5年間、子どもたちに大切に育ててもらった結果の大往生であった。

私の手を離れて、4家族で自主的に継続してくれたモルモットの飼育が、一応完結した。

5年間の飼育活動は、親の目にどのように映ったのか、そして、育てる会の活動を通して、どのような変化があったのか、率直な感想を会のメンバーであるU子の母親に書いていただいた。

教室においてグループで飼っていた2年間、シーリンをめぐることは、いろいろなことがあり、良い意味でも悪い意味でもうちの娘は特別な存在になっていたように思います。「シーリンを育てる会」にしてもお世話をした気持ち3割、あとの残りはおそらく義務感と意地であったと思います。決して崇高な動物愛からお引き受けしたものではありません。

ただ4人で飼うことになった時、これで無責任な仲間に腹を立てる必要がなくなったという開放感もあって、シーリンへの愛情がそこで大きく増えたという気がしています。

2ヶ月に1回、シーリンは我が家にやってくるのは、得意のおねだり攻撃で野菜を食べては我が家に微笑みの種をまいていってくれました。そして、次の方にお回しする時には、親の私はまるで自分の子供を移動教室にでも送り出すような気分にならなりました。

4月の下旬、無事に送り出したシーリンでしたが、Sさんが旅行に出かけるということで、急遽、シーリンがもどってきました。「6月まで寂しいね」と言っていた矢先のこの偶然は、今にして思えば神様のお計らいだったのかもしれませんが。うちに戻ってシーリンはいつものように愛嬌をふりまき、しかし、その2日後、突然逝ってしまいました。我が家に戻ったのは、まるで「死ぬ」為だったとしか思えないような急逝でした。

一時は、ダイエットをしなければならぬほどの立派な体格だったシーリンでしたが、徐々に体重は減ってゆき、2ヶ月の移動教室から戻ってくるたびに1回りも2回りも小さくなっていくのは、見ていて痛々しいほどでした。

シーリンを育てる会が発足した時、たぶん誰しもが思ったことは「我が家では死んで欲しくない」ということだったろうと思います。ですが、体重の減りがプラトーンに達し、シーリンの死がそう遠い未来の話ではないと思い始めた時、私は自分の気持ちが変わってきていることに気づきました。「シーリンを看取りたい」「死ぬのなら我が家で」そんな思いがふつふつと沸き出してきました。そんな私の気持ちに伝えるように、シーリンは我が家で死を迎えました。

シーリンの死を他の3家庭に知らせ、電話口で親同士涙を流しました。その時、私は、ふと娘の学校文集の文章を思い出しました。娘は「シーリンが結んでくれている仲間との絆」という言葉を使いましたが、この絆は、子供同士のみならず、親の間にも存在していたことに驚きを隠せませんでした。シーリンは死んでなお、親の心の中にまで、温かいものを授けてくれたのでした。

シーリンの飼育を続けてきた中で、娘がどのように成長したか、どのような教育効果があったのか、そのようなことはわかりません。なぜなら、シーリンは子供の教育玩具ではなく、4家庭に引き取られた時点で、そのような見返りを求めない、ただの「愛おしく思う存在」だったからです。死を体験させた生命の尊さがどうのこうのという、そんな不遜な冷めた目でシーリンの死を見つめることは、私にはできません。

強いて言うならば、娘は、シーリンをかわいがることで「優しい気持ち」を心に宿すことができ、シーリンの死を痛ましく悲しく思うことで「愛情」というものを推測し得たのではないかと。そんなふうと考えております。

娘が文集に書いていた「シーリンからもらった宝物」が、これからの娘の人生にどのような影響を及ぼすのかは分かりませんが、「愛おしく思える気持ち」を持てる喜びを、シーリンからもらったのだということ、いつかそっと思い出して欲しいと思っています。

U子の母

これだけたくさんのお金をくれたモルモットたちに、私は心から「ありがとう」と言いたい。

そして、シーリンもきっと子どもたち、それを支えた家族の人たちに「育ててくれてありがとう」と言ってくれるのではないかと思います。可愛いと思う心、優しくする心を引き出してくれた動物との触れあいを、今後も継続していきたいと思う。